

自発・受身の成立条件

——思考動詞ラレル文ル形のテンス的意味に注目して——

高橋芽衣子 (名古屋大学大学院)

要旨

本稿は、思考動詞ラレル文が自発・受身文として成立する際の、それぞれの条件を分析するものである。

思考動詞は一人称をとりル形で現在を指す場合、発話時の態度表明文となる。思考動詞ラレル文の自発・受身の解釈成立にも、表明文になるか否かと同様の条件が存在する。自発用法が成立するラレル文は、一人称主体をとり、ル形で発話時から見た現在を指す。一方、受身文は人称が制限されず、現在を指す際にはテイルが後接し、ル形で未来を指す。これら表明としての条件におけるル形のテンス的意味の違いが、自発・受身文におけるアスペクト形式の後接可否や意味の相違にも影響している。

自発が思考動詞において特徴的であるのは、ある条件下で表明文になるという思考動詞の性質が関与しており、対象がどうなるかということに視点が置かれる受身文になり得るのも、動作動詞として、発話時以後の時間的な幅のある事態を含意するからである。

1. はじめに

現代日本語のラレル文¹は一般に、自発・受身・尊敬・可能を表す。同一形式で様々な意味を表すことになるが、多義解釈が同時に成立することは稀である。従って、各用法の成立にはそれぞれに条件があると考えられる。

自発用法は、「私には次郎が犯人だと思われる」のように思考動詞をはじめとする内的な動詞に典型的なものであるといわれている(森山卓郎・渋谷勝己 1988、森山卓郎 1988、植田瑞子 1998)。ところが、同じ思考動詞ラレル文であっても、「このままでは次郎が警察に犯人だと思われる」という受身用法も存在する。これらの用法は、何によって決定づけられているのだろうか。本稿は、思考動詞ラレル文の自発・受身に限定し、各用法が成立する際の条件を探るものである。

思考動詞は、他の多くの動作動詞にはない、発話時現在の態度表明という働きをすることがある。まずはこのような、思考動詞において特殊な振る舞いを生み出す条件を確認する。その上で、自発・受身文のテンス・アスペクトの様相を観察し、態度表明文となる条件を満たしている場合に自発解釈が成立することを述べる。また、自発・受身用法に後接するアスペクト形式およびアスペクト的意味に見られる違いや、ラレル形式の後接による自発あるいは受身という解釈が、成立条件と連動して生じていることにも言及する。

2. 思考動詞による態度表明

「思う」「考える」など、現代日本語における思考動詞は、テイル形の後接が可能な、動作を表す動詞であるといえる。これは(1)(2)から明らかであり、(3)の状態動詞には一般にテイル形を付加できないことと対照的である(金田一春彦 1950)。

- (1) a. 太郎がグラウンドを走る。
b. 太郎がグラウンドを走っている。
(2) a. 私は〇〇が犯人だと思う。
b. 私は〇〇が犯人だと思っている。

¹ 文末に(ラ)レル形式が付加されたものを指す。

(3) a. 広場に子供がたくさんいる。

b. *広場に子供がたくさんいる。

動作動詞と状態動詞には、ル形で発話時現在を指すか未来を指すか、という違いが存在することも指摘されている(金田一 1950, 鈴木重幸 1957, 寺村秀夫 1984)。これは、仁田義雄(2002)における時の状況成分²との共起関係で確認できる。「今のところ」が発話時点を表し、「今に」「このあと」は発話時以後を表すものである。

(1') a. {*今のところ/今に/このあと} 太郎がグラウンドを走る。

(3') b. {今のところ/*今に/*このあと} 広場に子供がたくさんいる。

動作動詞の(1')では、発話時以後を指す「今に」「このあと」、状態動詞の(3')では発話時点そのものを指す「今のところ」との共起が可能であり、それぞれル形が表すテンスの意味が異なっていることが分かる。

ところが、動作動詞であると考えられる思考動詞は、特定の人物の発話として想定した場合、発話者や主体の人称によって共起可能な時の状況成分に違いが見られる。

(2') a. 花子「{今のところ/?今に/?このあと} 私は〇〇が犯人だと思う」

(4) 花子「{*今のところ/今に/?このあと} 太郎は〇〇が犯人だと思う」

発話者である花子が思考動詞の主体となっている(2')は、発話時点を表す「今のところ」との共起が可能で、動作動詞である(1'a)とは異なる振る舞いを見せる。その一方で、発話者である花子ではなく、三人称主体の(4)では、動作動詞の(1'a)同様、ル形で現在を表すことができず、未来を指すといえる。

先行研究において、思考動詞はどのように扱われているだろうか。鈴木(1957)において、思考動詞は動作的な意味がないわけではなく、テイル形が後接するという点で動作性動詞と共通している一方、ル形で現在を表すことができるという状態性述語の特徴も見られることから、動作状態性述語に分類されている。寺村(1984)もまた、思考動詞を動的述語に属するものと捉えながらも、ル形が現在を指すことがあると指摘する。ただ、鈴木(1957)、寺村(1984)共に、思考動詞のル形が発話時現在を指すのは、話し手の心理内容・心的状態を述べる場合であるという特徴も挙げている。

(5) a. 「私は、〇〇さんが犯人だと思います」

b. 「警察は、〇〇さんが犯人だと{*思います/思っています}」

(5a)と異なり、(5b)のように思考主体が話し手でなくなると、発話時現在の思考内容をル形で表すことができなくなる。テイル形の付加で発話時現在を指すのであれば、思考主体が話し手に限定されることはない。

(6) 「{私/警察}は、〇〇さんが犯人だと思っています」

(6) ではテイル形が後接して発話時現在を指す。この場合、思考主体として話し手の一人称「私」の他、三人称の「警察」も許容されることが分かる。

思考動詞のル形が指すテンスの意味や人称については、工藤真由美(1995)が詳しく述べている。工藤(1995)は、動詞の時間的展開の有無によるアスペクト対立という観点から、まずは外的運動動詞と静態動詞とに分類した。その上で、外的運動動詞と同様に時間的展開が認められるが、直接体験できるのが話し手だけであることから、スル(シタ)・シテイル(シテイタ)というアスペクト対立が時間的展開性だけでなく人称とも絡み合っている動詞、内的情態動詞という区分を立てた。思考動詞はこれに属すものとされる。

工藤(1995)によると、内的情態動詞のシテイル(シテイタ)は、はなしあいのテキストにおいて、テンス形式や人称に関係なく外的運動動詞と同様に継続性を表すが、スル(シタ)は基本的に一人称に限ら

² 「事態の外的な時間的位置づけ、言い換えれば、時間軸上における事態の出現・存在を指し示す(仁田 2002 p.202)」とされるもの。

れる³ことが多く、スルの場合は現在の思考や感情の表明・表出を表すという。

(7)態度表明

太郎「僕は、花子が世界一かわいいと思うよ」

ただ、一人称主体であっても、直接体験性の有無が問題にならない未来、すなわち思考の予測を表わすことがある。はなしあいのテキストにおいて思考の予測を表わす場合、二、三人称をとることもできる。つまり、未来を指す文脈では人称が限定されない。次の(8)は三人称主体のものである。

(8)思考の予測

次郎「(着飾った花子を見て)かわいいよ。太郎も絶対、花子が世界一かわいいと思うよ」

ここまでの工藤(1995)の記述より、表明文には、一人称主体をとり、かつル形で発話時現在を指すという条件があるといえる。(8)のようにル形で未来を表すのは思考動詞に限ったことではなく、(1)のような動作動詞において一般的な現象である。ただ、思考動詞をはじめとする内的情態動詞は、一人称主体をとり、ル形で現在を指すという条件下では、(7)のように発話時の態度表明や、感情・感覚の表出を表す⁴ことになる。

なお工藤(1995)において、シテイル(シテイタ)は思考の継続を対象化して捉え、確認・記述していると見ることができると述べられている。

(9)継続の確認・記述

太郎「次郎も、花子が世界一かわいいと{思っている/思っていた}よ」

3. 自発・受身解釈の成立条件

以上のような思考動詞の性質を踏まえ、思考動詞ラレル文における自発・受身それぞれの解釈を観察し、条件を分析する。

3.1 対象とするラレル文

現代日本語のラレル文には、自発、受身、尊敬、可能、4通りの用法が存在する。

- (10) a. 私にはあの夏の日が懐かしく思い出される。 [自発]
- b. 太郎が花子に殴られた。 [受身]
- c. 社長が二次会に参加されるそうだ。 [尊敬]
- d. 私は納豆が食べられる。 [可能]

このうち、(10a)の自発と(10b)の受身は、格交替の様相が共通している。ラレル形式をとらない文の、〈動作主〉あるいは〈経験者〉(= 部)ガ格、〈対象〉(= 部)ヲ格が、ラレル文ではそれぞれ〈動作主〉あるいは〈経験者〉ニ格、〈対象〉ガ格となる。

- (10) a. 私ニハあの夏の日ガ懐かしく思い出される。
- a'. 私ガあの夏の日ヲ懐かしく思い出す。
- (10) b. 太郎ガ花子ニ殴られた。
- b'. 花子ガ太郎ヲ殴った

この格の取り方は、自発ではニ - ガ、受身ではガ - ニになるよう語順が異なる上、自発の〈経験者〉

³ テンス形式と人称制限については、テキストの種類との関連においても述べられている。はなしあいのテキストと区別されるかたりのテキスト及び解説のテキストにおいては、ル形と二、三人称との共起が可能であるという(工藤 1995)。金水敏(1989)でも、小説や物語の地の文「語り」の文体において、人称制限が観察されないとする。

⁴ 思考動詞のタ形では、表明・表出性そのものではなく確認・記述性がでてくるが、一人称に限定されるという(工藤 1995)。一人称主体を取るという条件も重要だが、テンスの意味に関しては、工藤(1995)の記述より、発話時の表明・表出性を表していることが明らかなル形で現在を指すという点を表明・表出の条件として重視し、分析を行う。

は、(10a)のようにニハによる表示の方が自然に感じられ、ハのみで表されることも多い。また、ラレル文受身用法では主語が〈動作主〉あるいは〈経験者〉から〈対象〉へと交替しているが、自発用法では、ニ格で表示される〈経験者〉に主語の特性が認められることが指摘されている(森山 1988)。

(11) *私には、先生のことが懐かしく思い出されなさる。

(12) 先生が花子に殴られなさる。

(11)の自発では、尊敬表現「なさる」が、ガ格「先生」でなくニ格「私」に対して用いられる解釈しか成立せず、不自然な表現である。尊敬先となる主語はニ格の「私」であり、その「私」に対する尊敬表現の使用が不適切であることが原因であるといえる。一方(12)の受身における「なさる」の使用は適切である。ニ格「花子」でなくガ格「先生」が尊敬先となっており、主語が「先生」であることが確認できる。このように、自発と受身では、主語がニ格かガ格かという違いが見られる。これらの主語の違いという現象にも何らかの説明がなされるべきであるが、本稿においては、自発、受身共に〈動作主〉〈経験者〉ガ格がニ格で、〈対象〉ヲ格がガ格で表示されるという共通点に注目したい。

尊敬は、受身から派生したもの、自発から派生したものなど諸説ある。いずれの説をとるにせよ、尊敬と自発・受身は格の現れ方が大きく異なっており、解釈の多義が生じにくいことから、本稿の対象とはしない。可能も自発と同様に、〈対象〉をガ格で、〈動作主〉〈経験者〉をニ格や、ニ格にハが後接した形、あるいはハのみで表す。しかし現代語では、思考動詞ラレル文が肯定文の場合、自発・可能の間で解釈が揺れることがあるが、否定文であれば、ほぼ不可能の解釈に限定されるように感じられる。自発は肯定文、可能は否定文に偏って現れるという傾向があると把握できる。この点に関しては、意志が有るか無いか、事態が実現するかしないか、という観点において、特殊な捉え方をした場合に見られるものであると考えられている(尾上圭介 2003)。自発と可能に関しては、格表示の仕方が同様であっても、述べられる情報に違いがあり、その違いそのものや、結果として現れる肯否という差異が条件となり、解釈が決定されるといえる。以上より、ラレル形式を取らない文との格交替の様相が共通している自発・受身を対象とし、解釈決定の要因を探る。

また、自発・受身両用法を決定づける条件の分析が本稿の目的であるから、ラレル型述語となる動詞は思考動詞「思う」「考える」に限定する。これらの動詞による自発は、堀川智也(1992)によって「ある事態に対する判断が可能になることを表わす(p.180)」判断型に分類されるものである。次の2例は、判断型の自発である。

(13) 彼が犯人だと思われる。

(14) 損害は一億円に上ることが見込まれる。

堀川(1992 p.172、下線は筆者による)

堀川(1992)は自発用法を、判断型その他、「惜しむ」「悔やむ」などの動詞によって「何等かの感情・気持ちが生じてくる(p.172)」という意味を持つ感情生起型、「思い出す」「感じる」などによって「ある対象が、自然に意識にのぼってくる、想起されてくる(p.179)」想起型に分類している。感情生起型及び想起型は、ごく自然な自発用法であるが、受身としては用いられにくく、自発と受身の決定的な違いを分析する対象として適切であるといえない。やはり同一の動詞を対象とすべきであろう。また「思う」は、「残念に思われる」のように形容詞/形容動詞の連用形に後接する形で用いられた場合、感情生起型になると指摘される。そのようなものについては堀川(1992)で、動詞が存在しないという穴を埋めるために用いられた表現である可能性が言及されており、判断型となる「思う」とは区別するべきであると考えられる。

3.2 自発・受身の人称とテンス的意味

テイル形を取らない思考動詞の場合と同様に、自発・受身となるラレル文の人称とル形のテンス的意味、テイル形の後接可否を確認し、各用法の成立条件を分析する。ここで述べる人称とは、ラレル

形式を取らない思考動詞文ではガ格をとり、思考動詞ラレル文においてニ格をとる（経験者）としての主体にかかわるものをいう。

(15) 花子「太郎さんは、誰を疑っているのですか」
太郎「僕には、〇〇が犯人だと思われる」 [自発]

(16) 太郎「〇〇が当時現場近くにいたこと、聞かれたので言っていました」
花子「なんてことを！ それでは、警察に〇〇が犯人だと思われる」 [受身]

ラレル型述語「思われる」文のうち、(15)は自発、(16)は受身に解釈されるのが自然である。ところが同じ「思われる」という形でも、(15)の自発は発話時から見た現時のことを表わし、〈経験者〉が「僕」と、一人称主体をとる。

(15') 花子「太郎さんは、誰を疑っているのですか」
太郎「僕には{今のところ/*今に}、〇〇が犯人だと思われる」 [自発]

(17) 太郎「あの人には、〇〇が犯人だと思われる」 [受身]

(15')のように発話時点そのものを指す「今のところ」と共起することから、ル形で未来ではなく現在を表すことが分かる。(15')の発話時には、既に「〇〇が犯人である」ことについての太郎の思考活動は成立している。発話時を基準とした未来を表す「今に」との共起は不自然である。また(17)は、主体が話し手ではない思考動詞ラレル文であるが、自発ではなく受身のように感じられる。実際の用例⁵⁾においても、自発用法の主文末ル形は、発話時から見た現在を指す。一人称主体が文中に現れていないが、いずれの例も話し手が主体であると判断できるものである。

(18) 「上野動物園のシマウマについてヨコジマは、ベルリン動物園のシマウマのタテジマがヨコについてものだと思われる」(ブン) [自発]

(19) 「いま世界を見渡して、大ロシア皇帝に対し、戦線の布告をなしうるような勇敢な国があるとは思われません」(山本) [自発]

一方(16)のように、受身は人称が問題とならず、ル形が、発話時を基準とした未来に起こる出来事を指す。

(16') 太郎「〇〇が当時現場近くにいたこと、聞かれたので言っていました」
花子「なんてことを！ それでは、{*今のところ/今に}警察に〇〇が犯人だと思われる」 [受身]

花子の発話は、警察が「〇〇が犯人である」と思う可能性についての言及に過ぎず、「思われる」という動詞述語で表される思考活動はまだ行われていない。「今のところ」「今に」との共起関係からも、自発・受身におけるル形のテンス的意味の違いは明らかである。また受身文では、〈経験者〉としての主体の人称が制限されない。

現時をル形で指す自発に対して、受身ではテイル形の後接により、現在における進行中の状態を表す。受身文には後接可能なテイル形が、自発文では許容されない。

(20) 太郎「*僕には、〇〇が犯人だと思われている」 [自発]

(21) 花子「〇〇が警察に犯人だと思われている」 [受身]

用例を見ても、現在を表す受身文は、従属節内に出現するものを除くと(22)(23)のように全てテイル形が後接する。

(22) 「ねえ、ねえ、お父さん。お父さんはつまり、藤原んちなどから見ると、半失業者だと思われているのよ」(太郎) [受身]

(23) 「アメリカでは、ノートンみたいにクレバーなボクサーじゃないと思われてるぜ、つまり馬

⁵⁾ 『CD-ROM版新潮文庫の100冊』のうち、翻訳作品を除いたものから採集。下線などは筆者による。

⁶⁾ 否定表現を伴う思考動詞だが、可能動詞「思える」があることから、自発の解釈も認められると考えられる。

鹿だって」(一瞬)

[受身]

受身は自発と異なり、主体の人称制限が見られない。ただ、多くの場合三人称をとっている。

これら現象面に関する指摘は先行研究でも見られる。自発のル形が発話時現在を指す現象については、植田(1998)で言及されている。また仁田(1991)は、「～ト思ワレル」「～ト考エラレル」などが判断のモダリティ形式に近づいており、ル形でも発話時現在を表わせる」と述べている。川村大(2004)もまた、現在を指す場合、自発はテイル形ではなくル形を用いるが、受身ではテイル形が一般的であるとする。主体の人称という条件については、自発文は通常一人称をとるという指摘が森山(1988)に見られる。

2節で、思考動詞が表明・表出文となる条件として、一人称主体をとり、ル形が発話時現在を指すという点を確認した。また、先行研究における現象の把握及び小説中の用例より、自発文は、発話時現在をル形で指し、一人称主体をとるが、受身文が現在を指す際にはテイル形となり、主体の人称も制限されないことが分かる。この事実は、ラレル形式の解釈として、一人称主体をとり、ル形が発話時現在を指すという表明・表出文となる条件を備えた思考動詞文においては自発、人称に制限がなく、ル形で未来を指す動作動詞として働く思考動詞文では受身が、それぞれ成立することを示す。対象とした自発がすべて判断型であるから、表明・表出の条件を備えている文の分類に従うと、態度表明文ということになる。森山(1988)が、自発用法が成立する動詞は表出の表現となる内的なものであると述べるのも、自発が表明・表出と同じ条件で成立するからであると考えられる。

以上まとめたように、表明・表出となる条件が、自発・受身の解釈成立に関わっているといえる。表明・表出という働きは、思考動詞などの内的な動詞に見られる現象である。現代日本語において、ラレル形式の付加により自発文となる動詞が思考動詞に偏るのは、思考動詞が、多くの場合は動作動詞として機能するが、特定の条件においては態度表明文になるという性質による。このような特殊な性質故、思考動詞によるラレル文に自発用法が典型的との把握がなされてきたと考えられる。

4. ラレル文のAspect

自発・受身文に後接するAspect形式や、Aspectの意味に違いが生じることは先行研究によって既に指摘されているが、それらの違いが生じるのは、3節で明らかにした自発・受身の成立環境の違いによるものである可能性を述べる。

4.1 現象の確認

既に述べたが、受身には、自発の場合には不自然となるテイル(テイタ)形の後接が可能で、現在あるいは過去における進行中の状態を表す。

(24) 「ねえ、ねえ、お父さん。お父さんはつまり、藤原んちなどから見ると、半失業者だと思われているのよ」(太郎) [受身] ((22)再掲)

(25) 「蛭はあの魚の使者だと思われていたのよ。要するに手下のようなものね。(略)」(世界) [受身]

他にも、Aspectの観点からは次のような違いが見られる。自発用法としてのラレル文にテイル形が後接すると不自然だが、テクル(テキタ)形の付加は許容され、状態の出現を表す。

(26) 「そう言われると、〇〇さんが犯人だと思われ{てくる/てきた}」 [自発]

(27) 「いいのよ。もう私の機嫌は直ったわ。お風呂に入って、あったまって、元気がでてくると、一日中、歩きつづけたことが、なにかこう楽しいことのように思われて来るのよ」(孤高) [自発]

この点は森山(1988)にも、自発では「出現のテクルで表されるように、始動的な意味が取り上げられ、

それ以外の意味は問題にならない(p.132)」という記述が見られる。

一方受身では、テクル形の後接は許容されないが、テキタ形は付加可能で、自発とは異なり、長期の継続を表す(植田 1998)。

(28) 「〇〇さんは、20年もの間、犯人だと思われ【*てくる／てきた】」 [受身]

次の「過ぎてまいりました」はテキタと同様の働きをしていると考えられる。

(29) 「わたくし、亡き父宮にも、強情もの、と思われ【過ぎてまいりましたの】。いまさら周囲に押し流されるようにして結婚するのは、わたくしに似つかわしくございませんわ」(新源氏) [受身]

テクル(テキタ)が後接する自発文には、仁田(2002)によって変化の進展を表すとされる「だんだん」「次第に」といった副詞が共起する⁷。受身文においては「だんだん」「次第に」ではなく、持続性のある事態を表す「長年」「ずっと」が共起する。

(27) 「一日中、歩きつづけたことが、【だんだん／次第に／*長年／*ずっと】なにかこう楽しいことのように【思われて来るのよ】」 [自発]

(29) 「わたくし、亡き父宮にも、【*だんだん／*次第に／長年／ずっと】強情もの、と思われ【過ぎてまいりましたの】」 [受身]

自発にはテイル形の後接が許容されないが、テクル(テキタ)形で状態の出現の意味を持つ。受身はテイル形で状態の継続を表すことができる。また、テクル形の後接はできないが、テキタ形が長期的継続を表す。

なお、受身文におけるアスペクト形式の後接可否・アスペクト的意味は、ラレル形式が後接せず、思考動詞が動作動詞として働いた場合と共通している。一人称主体をとる思考動詞文が必ずしも態度表明文になるとは限らないが、三人称主体であれば、ル形で未来を指す動作動詞文である。その場合、テイル(テイタ)の後接が可能で進行中の状態を表し、テキタが長期的継続に解釈される。

(30) 警察が〇〇を犯人だと思う。

- a. 花子「警察は、〇〇が犯人だと【思っています／思っていました】」
- b. 花子「警察は、【*だんだん／*次第に／長年／ずっと】〇〇が犯人だと思【ってきました】」
- c. 花子「警察は、【だんだん／次第に／長年／ずっと】〇〇が犯人だと思【てきます】」

(30a)のテイル(テイタ)形は共に共起可能で進行中を表す。(30b)は「長年」「ずっと」が共起することから、テキタ形が状態の出現ではなく長期的継続を表すといえる。(30c)からは、いずれの用法であってもテクル形の後接が不可能であることが分かる。自発のアスペクト形式に関する様相は、(30)で見たような動作動詞の場合のものとは異なっている。動作動詞としての思考動詞と受身との間に見られるアスペクト形式の後接可否・アスペクト的意味の共通点は、自発においては見られない。

4.2 ル形が表すテンス的意味とアスペクトとの関連

アスペクトに関して、受身には見られる思考動詞との共通点が、自発では見られないという現象について、各ラレル文のル形が表すテンス的意味の違いに注目し、説明を試みる。

まずは自発・受身ル形のテンス的意味を、共起する副詞を手掛かりに、より詳細に見ていく。表明文は、動作動詞として働く思考動詞とは異なり、ル形で発話時現在を指すという条件下で成立する。同様の環境で成立する自発文が「今のところ」と共起し、ル形のテンス的意味が現在であることはすでに確認した。ところが、仁田(2002)において「今のところ」と同じく、発話時を含む時間帯を表す成分とされる「今」「今日」との共起は、容認度に違いが見られる。いずれの成分も、発話時を含む時

⁷ 仁田(2002)によると、「(略)変化ではないものの、事態の存続・展開によって、事態の実現度に漸次的拡大の生じるものであ(p.243) れば共起可能であるという。(26)(27)のような自発文はこの類であると考えられる。

間帯を表してはいるが、その時間の範囲に違いがあるという。

(15^{*)} 花子「太郎さんは、誰を疑っているのですか」

太郎「僕には、{今のところ/今/*今日}〇〇が犯人だと思われる」〔自発〕

「今のところ」は発話時点を指すが、「今日」は発話時を含んだ幅のある時間帯を表し、「今」はどちらの性質も併せ持つ存在である(仁田 2002)。表明となる動詞文は、ル形で現在を指しているとはいえ、幅のある時間的展開までは含意しない。

一方ル形の受身は、「今に」「今後」「いずれ」が共起する。これらは発話時以後の未来を指すものである。動詞のル形が発話時以後の未来を指すということは、森山(1988)の記述によると、その動詞で表される事態は時間的に幅を持つものであるということだといえる。

(略)動きを表す動詞のスル形は、一般に未来を指す。／これは、発話の時点という極めつけの一時点(瞬時)において、動きを表す非状態的な述語が、その動きの両端を区切って(一まとまりにして)とりあげられないということを表すものである。(p.264)

ル形で未来を指す動作動詞、例えば「壊す」であれば、「壊す」という主体動作の開始から「壊れる」という対象変化までの、時間的な展開の過程を持つ動きを表す。表明となる条件を満たさない受身文は、思考動詞が、非状態で動きを表す動詞、つまり動作動詞として働いているといえる。

では、これらの違いによって、なぜアスペクトに関する相違が見られるのだろうか。受身では(24)(25)のように自然であるテイル形の後接が、自発の場合は不自然である。自発文にテイルの後接が許容されないのは、自発となるラレル文が、表明文として機能しているからであると考えられる。

表明文は、その事態が成立する時間的展開が特徴的である。時間幅のある均質的な動きを表す動詞は、時点を表す時間的成分が共起しにくい(日本語記述文法研究会編 2007)。

(31)^{?)}今朝 6 時、勉強した。

(31)の動詞「勉強する」は、瞬間的な動きを表すわけではなく、均質な動きが時間幅を持って展開される。その一方で、時間幅がない動きを表す動詞であれば、副詞的成分によって動き・変化の成立時点に焦点を当てることができる。

(32) 太郎は深夜 3 時半に、テレビのスイッチをつけた。

(33) 雷が落ちた瞬間、パソコンが壊れた。

思考動詞は継続的な動作を表す動詞であるから、時点を表す成分は共起しないはずである。ところが、(31)と比較すると、思考動詞文(34)は共起が自然なものとなっている。

(34) 太郎「昨夜 8 時、実は次郎もずっと花子のことが好きだったのではないかと考えた」

日本語記述文法研究会編(2007)によると、状況の変化を捉えるような文脈においては、時間幅のある均質的な動きを表す動詞であっても、動きの開始時点を副詞的成分で捉えることができる場合があるという。

(35) 大雨で止まっていた電車が午後 6 時に動いた。(日本語記述文法研究会編 2007 p.25)

午後 6 時以前は止まっていた電車が、午後 6 時という成分が指す時点に動き始めたという状況変化を表す。午後 6 時という時点は、「動いていなかったものが動く」という、瞬間的な変化の開始時点である。(34)の思考動詞も、午後 8 時以前には思いつかなかった考えが、午後 8 時という時点において浮かんだ、という解釈ができ、状況変化を表すといえる。午後 8 時は、「(それまでにはなかった考えを)考える」という状況変化開始の時点となる。

思考動詞による状況変化の開始時点を把握するということは、態度表明という思考動詞文の働きと関係が深い。態度表明とは、それまで思考の対象でなかった内容に関して思考するようになった瞬間、あるいは、思考はしていたが、言語で述べていなかった内容を表現した瞬間に見られる働きである。従って態度表明もまた、思考活動あるいは言語による表現を行っていない段階から、ある時点に

においてそれらの活動を行い始めるといふ(35)同様の状況変化を表しているものだといえる。

受身文と異なり、自発文にテイル形の後接が許容されないのは、自発文が態度表明と同じ環境で成立し、性質が類似しているからである。態度表明は未来を含まない、発話時現在における状況の変化を表す。出来事そのものに幅がなく、継続性を表すことができない上、結果を残す動きでもない。それ故、テイル形の付加が許容されないといえる。

受身の場合テイル形の後接が自然であるのは、受身文における思考動詞が動作動詞として機能しており、瞬間的ではなく、時間的幅を持つ動きを表すからである。このアスペクト的性質と受身用法は深く関連している。受身文のル形が表す事態は、発話時という一点的なものではなく時間的な幅を持つ。思考動詞は、主体や対象の変化を表さず、終了限界は内在しないが、動作動詞として、発動以後の時間的幅を持つ動作を表すことができ、動作開始後、その動作によって何かの形で他者に働きかけるといふ事態まで読み込むことが可能となる。つまり、働きかけを含意している。それ故、「動作の受け手がどうなるか」といふ事象の結果性を表す受身文の意味機能(林青樺 2009 p.108)を、動作動詞としての思考動詞が担うことができる。思考動詞は変化動詞ではなく、厳密な意味での結果性とはいえないが、対象への働きかけを表すと考えられる。この動詞の性質により、思考動詞ラレル文が受身として成立し得る。

同様に、テクル(テキタ)形の後接可否や用法による意味の違いについても、態度表明文としての性質という観点から、次のように分析される。自発文に後接するテクル(テキタ)形は、状態の出現や変化の進展という意味を表す。一方受身ではテキタ形のみが許容され、長期的な継続を表す。思考動詞による表明という機能は、表明以前の状態からの変化を表しているということになる。表明という、表明以前の段階からの状況変化を述べる働きを思考動詞が果たしており、自発は、思考状況の変化や思考内容の出現を表していることになる。それ故に、テクル(テキタ)形が状態の出現や変化の進展を表す。表明文と同じ環境で成立するラレル文は、動作の発動時に重点が置かれる表現であるから、森山(1988)で「新たに何かが自然と出現してくる(p.128-9)」意味を持つとされる自発解釈が成り立つといえる。テクル(テキタ)形が長期的継続を表さないのは、表明という、発話時現在の一時点における状況変化が長期間に亘って続くとは考えられないからである。一方受身では動作の受け手が焦点化されるから、後接するテキタ形は、いわゆる動作の受け手が被った影響の長期的な継続を表す。

5. おわりに

思考動詞ラレル文の自発・受身用法は、態度表明文となる条件を満たしているか否かによって決定していると結論付けられる。思考動詞は動作動詞でありながら、ル形で現在を指し、一人称主体を取ると表明文になる。自発はこの表明文と同様の条件を備えている。他の動作動詞とは異なり、思考動詞はこのような条件下において表明文になるという性質を有している。それ故、自発が思考動詞に特徴的なものとなると考えられる。また、自発が動作の非意図的な発動を表すとされるのも、表明文としての条件を満たしているからであろう。一方、動作動詞としての働きしか見られない条件下では、思考動詞ラレル文は受身となる。受身文は、ル形で動作の開始限界以降の、変化や対象への働きかけを捉えて表現するものである。発話時における動作の発動だけでなく、その後の時間的な幅を有する事態も含意するという性質は、対象がどうなるかということに視点が置かれる受身文の本質に沿う。

表明文になる性質を持つ思考動詞だけでなく、認識に関わる動詞「見る」もまた、ラレル型述語となった場合、用法によってル形のテンス的意味が異なる。

- (36) 「(略)ご承知の通り、ロンドンの地下鉄は、非常に深く、これは絶対安全な避難所で、誰もおびえたり泣き言を言ったりしている者はおらず、混乱もほとんど見られません。(略)」

(山本)

[自発]

(36)は否定文だが、自発用法においてル形が指すのは現在で、主体は一人称である。(37)の受身文では、ル形が未来を表し、主体も一人称に制限されない。

(37)「でも一般の人にとっては同じことよ。疑いの目で見られるわ。尾島さんも近所から白い目で見られるんじゃないかしら。そのうちに無理心中とかー」(女社長) [受身]

「見られる」という動詞述語でも、ル形が表すテンスの意味とラレル文の用法の間に相関があり、思考動詞以外の動詞文においても、表明文となるか否かに見られるものと同様の条件が、自発・受身の解釈決定に関わっていることが分かる。

なお、今回考察の対象外とした感情生起型及び想起型自発となり得る動詞に関しても、次のことが確認された。(38)の想起型自発文でも、判断型と同じく、ル形で現在を指し一人称主体であるという表明文となる条件を満たしている。また、(39)のように受身文となる場合、ル形で指示するのは未来であり、人称も制限されない。

(38)「まるで、南フランスのニースか、カンヌやリヴィエラそっくりではないか。この風景を見ると、ニースやカンヌやリヴィエラのことが、しみじみ思い出されるなあ。(略)」(ブン) [自発]

(39)「こんなに遅くまでおひきとめして、Mさんのお母さまに恨まれますよ」(聖少女) [受身]
問題としたはなしあいのテキストからの用例ではないが、テクル(テキタ)の後接可否や解釈も、判断型自発となる動詞と同様の様相を見せる。

(40) 在所から売られてきた娘の、今日の行列のさまざまが思い出されて来る。(放浪記) [自発]

(40') 今日の行列のさまざまが、{だんだん/次第に/*長年/*ずっと}思い出されて来る。[自発]

(41) そのうちに不図、先程の花火が思い出されて来た。(檸檬) [自発]

(41') 先程の花火が{だんだん/次第に/*長年/*ずっと}思い出されて来た。⁸ [自発]

受身文では許容されないテクルの後接が見られ、その解釈も状態の出現や変化の進展であることが分かる。感情生起型・想起型自発になり得る動詞が受身として用いられにくいということは、これらの動詞の性質と、表明・表出文としての条件が何等かの形で深く関連している可能性が考えられる。この点の分析は今後の課題としたい。

以上、先行研究で指摘されてきた自発・受身に後接するアスペクト形式・アスペクト的意味の違いは、各用法における動詞が表す事態の違いに拠ること、また、自発用法が思考動詞に特徴的であるのも、ある条件下において表明文になるという思考動詞の性質によるものであることを述べた。

⁸ 自発文とした場合、「長年」「ずっと」の共起は許容されない。

引用文献

- 植田瑞子(1998)「「自発」表現の一考察——自発文の二系列——」『日本語教育』96号 pp.109-20
- 尾上圭介(2003)「ラレル文の多義性と主語『言語』32巻4号
- 川村大(2004)「受身・自発・可能・尊敬——動詞ラレル形の世界——」尾上圭介編『朝倉日本語講座 6』朝倉書店 pp.105-27
- 金水敏(1989)「報告」についての覚書、仁田義雄、益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版(pp.121-9)
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」(金田一春彦編(1970)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房に再録 pp7-26)
- (1955)「日本語動詞のテンスとアスペクト」(金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房に再録 pp.29-61)
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房
- 鈴木重幸(1957)「日本語の動詞のすがた(アスペクト)について——ヘスルの形とヘシテイルの形——」(金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房に再録 pp.65-81)
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- (2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編(2007)『現代日本語文法 3』くろしお出版
- 堀川智也(1992)「現代日本語の自発について」『言語文化部紀要』22 pp.171-83
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の記述的研究』明治書院
- 森山卓郎・渋谷勝己(1988)「いわゆる自発について——山形市方言を中心に——」『国語学』152集 pp.47-59
- 林青樺(2009)『現代日本語におけるヴォイスの諸相 事象のあり方との関わりから』くろしお出版

用例出典

- 『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』新潮社
- 略称 (ブン)『ブンとファン』、(山本)『山本五十六』、(路傍)『路傍の石』、(太郎)『太郎物語』、(一瞬)『一瞬の夏』、(世界)『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』、(孤高)『孤高の人』、(新源氏)『新源氏物語』、(女社長)『女社長に乾杯!』